

ベルクソン『意識に直接与えられたものについての試論』における社会的生

楠原 涼平

La vie sociale en l'Essai sur les données immédiates de la conscience de Bergson

KUSUHARA Ryohei

はじめに

本稿では、ベルクソンの最初の著作である『意識に直接与えられたものについての試論』（以下『試論』）における「空間の直観はすでに社会的生（la vie sociale）への第一歩なのである」（DI 102-3）という記述の解釈をしたい。こうした読解を通して、『試論』の中心的な議論である持続と空間の形而上学のうちで社会的生について捉えることが可能になるだろう。はじめに、なぜ社会的生について問うのか、そしてなぜ『試論』においてこれを研究するのかという2点を明らかにしておこう。

まず、ベルクソンにおける社会的生を論じるのはなぜか。ベルクソンは彼の哲学的探求において本性上の差異を持つ2つの極を見極めるという方法をとる¹。たとえば、持続と空間、精神と物質といった区別が挙げられる。こうした2つの極のうち動的な実在、つまり持続や精神の側を探求するのが形而上学の営みであるとベルクソンは考える。けれども、2つの極のうちの片方だけを論じるのでは不十分である。なぜなら、これらは実在の2つの側面に過ぎず、グラデーションとして存在するものであるからだ。それゆえベルクソンの思索は物質性の側にも向けられる。加えて、人間を理解するにあたってやはり物質性は重要である。人間は独特な仕方で物質を用いるからだ。その産物が例えば科学や社会や言語である。すなわち、ベルクソンは実在との独自の関わり方を人間に認めているのであり、人間の社会的生について理解することは物質性のひとつの側面について明らかにしてくれるだろう。

次に、社会についての議論をより一層深く扱っているその後の著作があるにもかかわらず、なぜ『試論』を取り上げるのか。ベルクソンの社会論の研究において『試論』は必ずしも重要視されてこなかったように思われる²。しかし、その後の著作において社会的生についての議論が立体的で豊穡な展開を見せるとしても、固定性としての社会についての基本的な理解はすでに『試論』において示されているのである。また、一見『試論』において中

心的な話題とはなっていない社会についての議論を殊更に取り上げるのは、いわゆる回顧的錯覚にあたるのではないかとの反論もあるだろう。ベルクソンは自身のその後の著作においてみられる要素を、以前の著作のなかに見出すことを批判した。けれども、注意深く読むならば、本書において中心的に議論される等質的空間や時間の空間化が社会的生にとって有用であることが繰り返し強調されていることが分かる。それゆえ、『試論』を題材に持続概念との関わりにおいて社会的生を論じることも無駄ではないだろう。

社会的生と持続との関係を明らかにするにあたっては、社会的生を成り立たせるものとしてベルクソンの空間概念について検討したい。そうした検討を通して、空間という等質的媒体の直観があらかじめ人間を社会的生へと向かわせる傾向を有するとベルクソンが考えたことの意味を明らかにできるだろう。

第1節 『試論』と同時期の資料における社会と自由

まず『試論』の内容に入る前に、ベルクソンが踏まえている社会についての理解を確認しておこう。『試論』執筆直後にあたる1891年から93年にかけて行われたアンリ四世校での政治哲学講義において、ベルクソンは社会とはなにかという問いについて思想史を振り返りながら、自然主義的主張と合理主義的主張を比較している（以下、講義録Ⅱ、163-9頁を参照）。社会についての自然主義的主張とは、スペンサーやシュフレに代表されるような人間社会を有機体としてとらえ、社会を物理的必然性の現れとする立場である。他方で合理主義的主張は、ホッブズやルソーのように人間社会を理性的産物として、つまり自由の現れとしてとらえる立場である。講義においてベルクソンは両者の立場の調停を試みている。つまり、自然主義的主張を事実において認め、合理主義的主張を権利において認めるのである。人間社会を有機体と比較することは、分業と連帯という側面について有意義な洞察を与えてくれるが、人間的な側面を無視しているとされる。人間は反省的思考という知性の形式を用いることによって、自然的な諸法則に反抗することが可能なのである。個人にとって自由とは自然的傾向に付加されて、その方向を決定するものであるが、同様に社会においても社会的本能が存在し、理性がそれらを用いることで自由が現れうる。

以上講義録における議論は正式な著作ではなく、そのままベルクソン思想の理解に応用するわけにはいかない。けれども、ベルクソンの問題意識を知るためには有用だろう。もっとも、上で述べたような人間社会についての自然主義的主張と合理主義的主張の調停の試みが著作において表面化するのには、『創造的進化』まで待たなくてはならない。けれども、講義録のベルクソンが、人間社会においても本能のような自然的傾向が存在することを認めている点に注目しよう。また、ベルクソンは社会的生が人類と同時に生まれたものであることを否定しない。そして、そうした物理的必然性や自然的傾向に抗するものとしての自由が問題となっている。ここで言われる自由とは知性の反省的思考によってもたらされるものであって、『試論』において主題となる持続の相のもとで捉えられるような人格の表現と

しての自由の側面とは必ずしも一致しないだろう。しかし、物理的必然性、すなわちものとしての自動運動に抗する傾向として自由を捉えている点では、『試論』においても同様である。『試論』における自由の議論とは、こうした自然的傾向への反作用が持続において生きる生命にとって本来的に備わっているものであることを明らかにする試みであるだろう。このような視点に立ったとき、一見すると個人の自由についてのみ論じられているように思われる『試論』においても、必然性とその反対向きの力という図式の背後には、社会的生における同様の構図がすでに控えているか、もしくは『試論』における自由についての議論を通してこのような着想を得たのではないかと考えられる。

もっとも、自由の現れとして人間社会を捉えるような議論を『試論』から無理矢理に引き出す必要はない。こうした論点は後の『道徳と宗教の二源泉』（以下『二源泉』）において明確に提示されている。けれどもこのような問題意識を『試論』においてもすでにベルクソンが持っているのだとしたら、社会的生を空間化によって得られるものの単なる具体例としてとどめておくことはできないし、また単純に個人の自由と対立するものと理解することももちろんできない。それでは『試論』における社会的生についての言及はどのような意味を持つのだろうか。あらかじめ述べておかなければ、等質的空間を直観する知性の働きが同時に固定性によって個人を縛るとしても単に自由の対立物ではない人間の共同性のありかたが暗に示されているのである。

第2節 空間概念と延長の知覚

『試論』の目的のひとつは、質的なものが量的空間的に表されるような経験にもとづいたものの見方を批判し、そうした経験を白紙に戻して直接的な意識へと立ち返ることである。しかし、質的なものを空間化するこうしたものの見方は、言語などを通じた社会的な経験によって形成されるものである以上に、社会や言語を可能にするものなのである。そして、質的なものおよび持続を空間化してとらえるような経験が可能であるためには、経験に先立って等質的な空間について知ることができなくてはならない。それゆえ、空間は直観されるものなのである。（ここで言われる直観とはカント的な意味での直観であり、のちにベルクソンが自らの哲学の方法の中心に据える直観とはさしあたり関係はない）

持続と空間はそれぞれ全く共通点を持たないふたつの多様性である。持続とは純粋に異質なものの連続なのであり、対して空間とは等質的なものである。持続は外在化されることはありえず、絶えずあらたな要素を生み出しつつ自らの質自体を変化させていくような実在である。他方、空間が等質的であるというのはむしろベルクソンにとって空間の定義である。質をもったものを抽象化して概念やイメージを形成するとき、もとあった質は失われることになる。そのとき前提とされている等質的なものこそが空間である。持続は、持続のある一部分を切り取ってしまえば質が変容してしまう有機的な仕方において多様性である。他方で、空間とは無限に分割されうるような媒体であり、任意に切り分けられた単位を量と

して積み上げることが可能な多様性である。そのうえ、空間は分割されたとしても全体としては変化しない。

持続が直観されるということは、時間とともに刻々と変化する意識の生成変化が持続そのものであるということを考えて自明である。他方で空間が直観されるものであるのは、空間が数を数えることを可能にするような媒体 (milieu) であるからだとされる。われわれが数を数えるときには、ある単位を思い浮かべそのイメージを空間上に位置づける。つまり数を数えるとは、空間にイメージを並置することであり、空間を切り分けることだ。それゆえ、われわれは数を数える以前に空間の概念をア・プリオリに有していることになる。しかし、空間をこのように切り分けるとき、質的な差異も生じうるだろう。たとえば、知覚によって捉えられるような位置関係の差異だ。ここでベルクソンは延長の知覚と空間の概念の区別を設ける³。こうした等質的媒体としての空間の概念は、人間に固有のものであるとベルクソンは述べる。他方で動物にとって空間は固有の質をともなって現れる。「動物にとっては空間は等質的ではなく、空間上の諸規定や方向も動物にとっては決して純粋に幾何学的な形態をおびていない」(DI 72)

このような等質的空間の概念は、質をともなった延長の知覚の抽象によって引き出されるのではないとされる。むしろ反対に「抽象が截然たる区別ならびに、諸概念あるいはそれらの象徴相互の一種の外在性を想定していることに注目するなら、抽象する能力がすでに等質的な媒体についての直観を含んでいるのが分かるだろう」(DI 72-3)。そして、このように任意に切り分けることが可能な等質的媒体の直観こそが、抽象や数や言葉を可能にしているとベルクソンは述べる。それゆえ、等質的空間の概念をア・プリオリに有しているということと、そうした空間の概念を質的なものや時間に適応する空間化とを明確に区別しなくてはならない。

第3節 言語と自我

ここでベルクソンが、持続と空間について論じるために考察の対象としていた数のみならず、言語についても言及していることに注目したい。空間を論じるために数についての考察からアプローチを図ったのは、心理的経験を数量的にとらえようとする精神物理学への批判が念頭にあったからだろう。ならば、空間について述べる時、言語の問題から語り始めることも可能であったはずだ。事実、後年ベルクソンが言語や概念による哲学を批判したことは有名である。

言語とはどのようなものか。それぞれ相互浸透的で質を持った内的な感情は、空間によって表現されることでその質を失い、非人称的なものになる。言語はそのような仕方でも感情を表現する。「言語はそれを把握するのに、その動性を固定せずにはいられないし、それをみずからの凡庸な形態に適応させるにさいしては、それを必ずや共通領域に陥らせなければならないからだ」(DI 96)。言語は内的なものを変形し空間に落とし込む。それゆえ、ベル

クソンは自我について根底的自我と表面的自我の区別を設ける。固有の質をもった未分化な自我と、空間において表現され質を失った自我との区別である。そして質的なものを等質的空間においてとらえるものの見方は、社会的生にとって有用であるとされる。「このように屈折させられ、まさにそのことによって細分化された自我は、社会的生一般、とりわけ言語の諸要請に対してはるかによく適合するから、自我もそうすることのほうを選び、次第に根底的自我を見失っていくのである」(ibid.)。

では、人間が社会も言語も存在しない純粋な生を生きているとしたら、未だ質を失っていない未分化な状態の意識を把握できるのだろうか。ベルクソンはそのようには考えていない。人間は空間を捉える能力をいわば本能的に有しているからだ。そこで冒頭でも引用したように「空間の直観はすでに社会的生への第一歩なのである」と言われることになる。つまり、人間にはあらかじめ自らを社会化する傾向があり、その傾向は空間の直観という人間に特有の本能的能力に由来するというのである。ベルクソンは繰り返し、空間化された自我が社会的生にとって有用であることを述べているが、むしろ反対に空間化こそ社会的生の条件なのである。

さて、これまで述べてきたとおり、空間とは質的なものを等質的なものとしてその固有性を失わせ、一般化することを可能にするような概念であった。このように考えたとき、記号として何かを指し示すような言語の根底にも等質的空間の概念があることは容易に見て取れる。けれども、以上の点に続いてベルクソンは、等質性を思い描く傾向が「共同で生活し、話すようにわれわれを仕向ける」(DI 103) 傾向と同じものであると述べている点はどうだろうか。これまで見た抽象化の作用と「共同で生活し、話す」こととのあいだには隔たりがないだろうか。というのも、内的意識から切り離され固定化されたイメージが存在するとしても、それが他者と共有されるとは限らないからだ。先の引用で言われたような「共通領域」がどのように担保されているのかということが明らかでない以上、空間の直観への傾向と共同性への傾向とを同一であると主張することはできないように思われる。しかし、『試論』からこうした人間の共同性を説明する論拠を見出すことは難しい。この著作においては、客観的な物質の対象と内的な意識の溝を埋める作業はなされていないのであり、共通領域は権利として最初から与えられているように見えるのである。それゆえ、以上の問いに本稿が答えることはできない。けれども、なぜベルクソンが空間の直観を共同性への傾向の根幹に据えるのかということは考えることができるだろう。

第4節 空間の概念と人間社会

さて、政治哲学講義においてベルクソンが人間社会における本能的な自然的傾向を認め、人間社会の形成が人類の誕生と同時的なものである可能性を示していたことは第1節でのべた。『試論』においても空間の直観を「本能」と形容していることに注目しよう。等質的空間の概念を獲得することは人間という種である限り必然的であり、その意味でも個人の

意識に対してア・プリオリである。そしてベルクソンは、こうした本能的特性を持った人間が生活の利便のために、等質的空間を介して固定化された感情の表現の仕方やふるまいをするようになる傾向があることを述べているのであった。しかし、なぜ社会的生のためには空間の概念が必要なのだろうか。

ここで『試論』において、他者とのいかなる関わり方が示されているか確認しよう。とりわけ他者について明確に現れているのは、美的感情および芸術についてベルクソンが論じる箇所である。ベルクソンは第1章において、質的なものが量的に表されるのはなぜかという問いについて研究するにさいし、外的な感覚に結びつかない深い感情の分析から論を展開する。例えば、ベルクソンはダンスについて述べる。ある身体の運動がそれに続く運動を予見させるようなとき、そのなめらかな運動に対して鑑賞者が抱く快感情が優美と定義される。そして、そうしたダンサーの運動と鑑賞者とのあいだに、ある種のコミュニケーションが打ち立てられることを論じている。優美な動きを見る鑑賞者は、あたかもダンサーの運動が自分自身の運動であるかのように思うのである。ここに身体的・物理的な共感が関与するダンサーと鑑賞者の関係があるとされている。こうした共感の作用を利用して、「われわれの人格の能動的な、というよりむしろ反抗的な諸能力」(DI 11)を眠らせ、ある感情に共感させることが芸術の目的であるとベルクソンは言う。さて、こうした共感関係においては、身体についての延長の知覚が必要であるにしても、等質的空間の概念は必要ないだろう。他者との共感的なコミュニケーションは、まず空間の直観を介さず生じるものなのである。

それではわれわれの問いに戻ろう。空間の概念を必要としないコミュニケーションが可能であるならば、なぜ空間の直観が共同性へ向かう傾向と同一視されているのだろうか。なぜ空間の概念を介さずに共同性を獲得することはできないのだろうか。ここで二つの論点を示しておきたい。第一の論点は「共同で生活し、話す」ことが、ある身体の運動とそれに共感する鑑賞者というふたつの身体間に関係に終始することはできないために、空間の直観が必要なのではないかということだ。政治哲学講義の「社会と呼ばれるのは、共通に受容された同一の法則のもとに生きる人々の連合である」(『講義録Ⅱ』、166頁)という文言は非常に辞書的な定義であるし、『試論』においてもベルクソンが社会という言葉をこうした意味で用いていると考えてさしあたり問題ないだろう。そうすると、「同一の法則」と呼ばれるものが集団内で共有されていることは、先に挙げたダンサーと鑑賞者の二者間のコミュニケーションのみで捉えられるものではなく、また別の説明が必要なのである。また第二に、後に『創造的進化』などで論じられるように、等質的空間の概念を有さないであろう膜翅目などの他の生物種においても社会が見られることを、『試論』のベルクソンが考えていないとは思えない。事実、講義においても動物の社会についての言及が見られる。それにもかかわらず、なぜ『試論』においては空間の直観を人間社会の条件であるかのように語るのか。考えられるのは、講義同様『試論』においても自然的な動物社会と理性的で自由の現われでもありうる人間社会との区別が有効であるということだ。

第一の点については上に示した説明に甘んじるとして、第二の点について以下では論じよう。『試論』における社会は一見すると自由とは対極にあるかのようにであるが、実のところ人間社会が自由なものであることは前提とされているのではないだろうか。ここで言う自由とは、社会の形態が自然的に決定されたものではなく、人間の手によって可変的に作られるものであるということである。さて、このことを論じるために『試論』におけるベルクソンの科学に対する規約主義的な態度について確認しよう⁴。というのも、科学における空間化の作用が取り決めによってなされたものであるなら、同様に等質的空間を媒介する社会的生についても取り決めによって形成された流動的なものであることが言えるからだ。

例えば、杉山はベルクソンの精神物理学に対する批判から規約主義的な態度を見てとる(杉山、182頁)。ベルクソンは、熱さの感覚を温度の度合いによって計測しようとするような、内的な感覚を物理的尺度によって分析する仕方を単なる規約に過ぎないとして精神物理学を批判する(DI47)。また、杉山は数的に把握される等質的時間についても同様に規約主義的なベルクソンの立場を読み取っている。そしてそのうえで「ベルクソンによる「直接与件」への還帰は、諸表象の「規約性」への着目と、表裏一体であったのだと言ってもよい」(上掲書、183頁)と述べる。このように考えるならば、当然内的感情や質的な知覚の空間化である言語も取り決めによって形成されるものであると考えなくてはならない。そして、『試論』において「共に生きる」ことと「話す」ことがほとんど常に並列で語られていることをふまえると、共同性ということがある種の取り決めの上に成り立っていると考えてよいだろう。

それでは、講義において言われていたある社会で共通に需要されているような「法則」についてはどうだろうか。こうした「法則」がどのように形成されるものであるかということ、『試論』から知るのには難しい。それゆえ、共に生き話すという共同性と、制度を持った共同体としての社会を区別し、次のように言おう。つまり、『試論』において言われている社会的生とは、共に生活し話すという共同性のことであり、人間の共同性が自然的な動物社会と区別されたものであることまでは言うことができる。しかし、制度を持った社会については『試論』においては論じられておらず、社会が自由の現われでありうるとまでは述べることはできない。ただし、共同性が等質的空間の概念を前提とした取り決めによって生じる流動的なものであることはすでに『試論』において前提とされているのである。それゆえ、ベルクソンは空間の直観を共同性への傾向の根幹に据えたのだ。

おわりに

本稿ではまず等質的空間の直観とその概念を用いた空間化の作用の区別、そして質をともなった延長の知覚と人間固有の等質的空間の概念の区別について簡単に論じた。そのうえで、空間の直観がわれわれを共同性へと向かわせる傾向と同一視されているのは、ベルク

ソンが人間社会を動物のような自然的な社会と区別し、人間の共同性のありかたが可変的なものであると考えているからであるということを示した。

ベルクソンの社会的生について理解するためには当然『試論』の読解のみに留まっていることはできない。たとえば、本稿では答えをえることができなかつた物質的对象と意識との隔たりの調停には『物質と記憶』の議論の検討が不可欠であるし、同様になぜ共有可能な表象を持つことができるのかということを知るためには『物質と記憶』第一章の感官の教育の議論を論じなくてはならない。また、人間の知性についての生命論的な展開を見せるのは『創造的進化』である。ベルクソンが「傾向」と呼んでいたものについての理解は、彼の進化論哲学の視座においてのみ可能だろう。そして、自由の現われとしての人間社会については『二源泉』の読解が必要だ。

しかし、社会的生についてのベルクソンの考えを『試論』にまで立ち返って検討することは重要であった。まず、『創造的進化』において本能によって社会を形成する膜翅目との対比において人間は知性によって社会を形成する種であることが述べられるが、生命の努力としての知性が原物質とどのように関わるかを知るためには、『試論』における空間の直観についての議論の理解が必要なのではないか。また、『二源泉』の読解のためにも重要な意味を持つだろう。まず、『創造的進化』においては生命がエネルギーを蓄積し、そのエネルギーを爆発的に消費することによってエランが起動することが述べられている。そして、人間において社会的生が文化的な蓄積の役割を担うことも明かされる。『二源泉』において、神秘家の記憶が「人類の記憶」と呼ばれるものから引き出されると述べられていることを考えるならば、エラン・ダムールの発動においても社会的生が可能にする蓄積の作用は重要な役割を果たすのではないだろうか⁵。ベルクソンは文明人と未開人を区別するものは獲得形質の遺伝や人間の本性の変容ではなく、その社会が積み上げてきた「人類の記憶」という。社会的生の蓄積の役割について論じることが、到達点の定まった目的論を批判しつつも「社会の進歩 (progrès)」について語るときベルクソンが何を考えていたのか理解するためにも重要だろう。

凡例

・ Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience* からの引用には DI の略号を用いその後にページ数を記した。また、引用に際しては参考文献表に挙げた邦訳を参照し適宜訳を改めた。

・ ベルクソンの講義録からの引用には邦訳のページ数を記した。

・ そのほかの文献からの引用には、著者名と出版年を指定しその後にページ数を記した。

注

¹ 『試論』においては意識の内外を隔てる二元論的な語り方が目立つが、結論部において事物に適応可能な諸形式を精神と物質の妥協(compromis)としているのを考えると(DI 168)、やはり『試論』においても質的な差異を持つ二つの極の見極めとその調停ということが念頭に置かれていたと言える。事実、『物質と記憶』においては『試論』の方法を以上のようにまとめている。

² Worms は空間の直観が社会的機能を持っていることを指摘すると同時に、空間が直観の形式であると同時に概念であるとはどのようなことなのか、空間が実在と一致するのはなぜか、空間はわれわれの生にとってどのような意義をもつのかを論じている。

³ 藤田は空間の直観を抽象化の働きと明確に区別することによって、ベルクソンが「空間の超越論性の維持」と「発生論的説明」の両方を試みていると指摘し、延長と空間を切り分ける(藤田、115 頁)。また実際藤田も指摘するようにベルクソン自身「延長についての知覚と空間という概念の形成とを区別しなければなるまい」(DI 71) と述べている。人間における等質的媒質への直観とそれが準備する社会的生についての検討である本稿においてもこのような区別は無視できないものである。

⁴ 杉山が『試論』におけるベルクソンの規約主義とそれにまつわる論争について詳しく論じている(杉山、2006年、181-7頁)。また、杉山も述べるところであるが、『試論』のベルクソンが科学に対して規約主義的な立場をとるとしても、科学の立場を不当に貶めようとしているわけではないことを強調しておきたい。『試論』において繰り返し示されているとおり、ベルクソンは外的な事物の存在を否定しておらず、内的現象を研究する仕方と外的事物を研究する仕方の区別を主張しているにすぎない。

⁵ たとえば本田はベルクソンにおける創造を、新しさそのものを生み出す第一の局面と既存のものに新しさを刻み込む第二の局面に区別し、知性と社会的生が人間において後者の創造を可能にするとしている。しかし、社会が創造に対して持つ有用性については、人間の活動の能率を上げるという点しか指摘されておらず、社会的生の蓄積の側面は考慮されていない(本田、1994)。

参考文献

ベルクソンの著作

Essai sur les données immédiats de conscience, Paris : PUF, 2013, [1889].

『ベルクソン講義録Ⅱ』合田正人/谷口博史訳、法政大学出版局、2000年。

その他の著作

F. Worms, *Bergson les deux sens de la vie*, Paris : PUF, 2004.

ドゥルーズ『ベルクソニズム』檜垣立哉・小林卓也訳、法政大学出版局、2017年。

杉山直樹『ベルクソン 聴診する経験論』創文社、2006年。

Guy Lafrance, *La philosophie sociale de Bergson*, édition de l'université d'Ottawa, Ottawa, 1974.

檜垣立哉『ベルクソンの哲学 生成する実在の肯定』講談社学術文庫、2022年。

藤田尚志『ベルクソン 反時代的哲学』勁草書房、2022年。

本田裕志「ベルクソンにおける神秘主義の二つの意義」『実践哲学研究』、1994年。

——『ベルクソン哲学における空間・延長・物質』晃洋書房、2009年。